

看護婦寮が倒壊（1995年3月号掲載・吉田 泰男）

東灘消防署深田池出張所の1階にある仮眠室で地震の揺れを体験した。揺れが収まってからすぐに庁舎ガレージのシャッターを押し上げ、外に出て周囲を見渡したところ、特に倒壊した建物はなく、時間的にも人通りは少なかった。

電話（加入電話）で、「甲南病院の看護婦寮が倒壊している」との通報があり、救急車（東灘92）で現場に向かった。

病院の職員の誘導にしたがって看護婦寮に到着すると、建物の1階が2階部分に押し潰された、いわゆる座屈した状況で、1階にいた看護婦数人が生き埋めになっているとのことであった。

病院の職員に協力を求め、2階の家具や畳などを外に出すと、床下部分から女性の声が聞こえてきたのだが、現場には鋸しかなく、病院の職員が懸命に切ろうとするのだが、能率が悪く、一向に進展しない。

そこで、私は1人で救急車を運転して、東灘消防署の本署に切断用機材を取りに戻った。

本署の工作室からエンジンカッター（エンジン付きの丸刃ノコ）チェーンソー（自転車のチェーンのような刃を回転させるノコ）を取り出し、非常招集で出勤してきた宮越隊員とともに現場に戻った。

チェーンソーを使って2階の床を切断して驚いた。1階の床と天井が同じ位置にあるのだ。

一人の看護婦さんは、ロッカーが支えになってできた空間で、同じロッカーに足を挟まれ動けない状況であったが、大声で叫べるほど元気そうであった。この人については状況が良かったので救出することができたが、残りの2人については、腕が見えるだけで救出に相当な時間がかかり、現状の機材だけでは手をこまねくだけなので、事情を説明して本署に引き揚げた。

本署に戻ると、庁舎内は多数の傷病者と、救助を求めて駆け込んできた人々で溢れかえっていた。

早速、傷病者を本署からさほど遠くない東神戸病院(東灘区住吉本町)に搬送したのだが、病院の西側道路には、自家用車で多数の傷病者が運ばれてきていた。

「担架を貸してくれ」

このままでは傷病者の状態がいつ急変するかもしれない。

溢れかえった車を整理し、車内の傷病者を順次、病院内へ搬送すると、病院内は病院内で患者で溢れかえり、入りきれない状況となっていた。

病院の医師から「病院内には入れない」と言われたが、重傷者を放っておくわけにはいかない。重症の人を優先に搬送を続けた。

お昼を過ぎた頃だったろうか、本署に戻り、他の隊員と交替してポンプ隊の小隊長として、火災現場や、建物が倒壊した救助現場を転々と移り、あっという間に数日間が過ぎていった。